



明治19年(1886)から変わらぬ姿で、この地域を見守ってきた。

## 有形文化財の建物が物語る屯田兵村の風景

北区

### しんことにとんでんへいちゅうたいほんぶ 新琴似屯田兵中隊本部

#### 九州から厳寒の地へ

明治20年(1887)に札幌で3番目に屯田兵が移住したのは、ここ新琴似の地である。当初、屯田兵の募集は東北地方の土族を採用していたが、やがて全国に地域を広げていく。新琴似屯田兵の募集はおもに九州・中国地方で行われ、移住者の85%が福岡・熊本・佐賀・大分という九州出身者であった。明治20年に146戸、翌21年(1888)に74戸が家族を連れて移住。計220戸による新琴似屯田兵村は第一大隊第三中隊と呼ばれる軍隊となった。

その中隊を束ね、指揮する重要な任務を

果たしたのが中隊本部である。建物は明治19年(1886)に建てられた。アメリカ中西部の開拓期に流行したバルーンフレーム構造が特徴的で、開拓使や北海道庁がアメリカの住文化を積極的に取り入れていたことを表している。役割を終えてからは新琴似兵村会の共有財産として引き継がれ、のちに新琴似公会堂などに利用されてきた。昭和30年(1955)に琴似町が札幌市と合併し、昭和40年(1965)に札幌市へ寄贈された。昭和47年(1972)には創建時の姿に復元され、札幌市指定有形文化財となっている。ほぼ完全な形で当時の原形をとどめている貴重な官庁建築の遺構である。

コレも見どころ

#### 細部までこだわって制作されたジオラマ

展示室には新琴似兵村の家族の作業風景や訓練の様子などがジオラマで再現されている。まだ白木の美しい中隊本部や、銃を構えて隊列を組む屯田兵達、兵屋の前に広がる畑を耕す家族。緑がまぶしい夏の風景だが、冬はどのような景色が広がっていたのだろうか。人形一人一人に表情があるような精緻なジオラマを、じっくりとのおぞき込んで見てほしい。



現在、建物は郷土資料館として活用され、内部の見学と併せて屯田兵村での暮らしなどを学ぶことができる。玄関を入ると右手に下士官集會室、その奥に中隊長室、左手には下士官事務室と軍医室があり、資料やパネルが展示されている。三角屋根の真下には窓も備えた小屋裏があるが、階段の傾斜が急なため見学は出来ない。

新琴似兵村で各戸に与えられた土地は、なんと約4,000坪。その中にそれぞれの兵屋が建っていた。土地には番号がつけられており、全員で番号札を引く抽選で区画が割り当てられ、用地によっては開墾のしやすさに差がある場所もあったという。



執務風景が目に浮かぶ中隊長室。飾られているのは中隊長の礼服である。

厳寒の冬も農作業の経験もなかった新琴似の屯田兵。粘土質の一大低地帯に巨大な排水溝を築き、農耕地に変わった新琴似はその後大きく発展を遂げていく。



当直室や炊事室だった部屋には開墾道具、養蚕・農具なども多数展示されている。

住所：北区新琴似8条3丁目1-8  
電話：011-765-3048  
休館日：12～3月冬期休館、4～11月の月・水・金・日曜  
観覧時間：10:00～16:00  
アクセス：JR「新琴似」駅から約500m  
資料収蔵数：約240点  
開館年：昭和49年(1974)